

井上晴丸先生の学問的業績

大 藪 輝 雄

井上晴丸先生が、一〇月五日午後一〇時四五分、急性心臓マヒのため急逝されました。大学院の演習を終えられ、来年三月に予定された定年退職を記念する経済学会学生委員会とのインタビューにこころよく応じられて、楽しいひとときをすごされた後、数時間のことでありました。急激に心臓を襲った発作は瞬時に死をもたらしましたが、口もとには微笑を浮かべ、みずからの死をそれと意識していなかったかのような死でありました。私は先生が亡くなった日の大学院の演習に午後三時頃まで御一緒しておりましたが、当日は大変お元気で、私が「先生、今日は非常に精悍な顔付をしていらっしゃいますよ。」というと、「そうかね、歯を入れたからかも知れないね。」などとおっしゃっておられましたのに、急に亡くなられて、言いようもなく残念であります。先生を偲んで、先生の生涯とお仕事の紹介をさせていただきますと思います。

一

最初に井上先生の略歴をたどりながら、先生の全体としてのお仕事の位置づけのようなことをしておきたいと存じます。

井上先生は一九二六年に熊本の旧制第五高等学校の理科甲類（一般的には大学の工学部へのコース）に入學され、一九三二年に卒業するまで、普通なら高校生活三年間のところを五年かかっております。これにはわけがありまして、先生はそのことを、後年「ある迷いの頃」という文章に、「これは、ほくの精神的恥部にふれるようでありまゝり語りたくはないのだが」と先生らしくはにかみながらも率直に語っておられます。簡単に申し上げますと、高等学校の三年生くらいの際に、人生問題といひますか、宗教問題といひますか、キリスト教との対峙といううなことから、統一的な世界觀を求めて悩まれるわけです。その過程で「自己の内側へ内側へともぐり込むのは、そもそも無駄な努力というもので、社会の裏側へ裏側へともぐり込むほうが、神への対峙を成しとげる近道ではないか」というふうな考えになつていき、「宗教のとりこになり切るためには、まず有無をいわず無条件に信ずること——これが要求されるのであり、これを、実践よりも、思惟よりも重んじ、先行させることがなければならぬが、このことは認識の運動からいつても、『自己欺瞞』なしには行なえない性質のことであり、要するに、宗教でいう信仰とは自己欺瞞にほかならないのではあるまいか」と思うようになって、フォイエルバッハの『キリスト教の本質』から、エンゲルスの『フォイエルバッハ論』を経て、マルクスの『賃労働と資本』へと進み、マルクス主義と経済學に開眼していかれます。この思想的成長過程は、ちょうどドイツ古典哲學からマルクス主義への思想的發展を跡づけているようで非常に興味深いものがあります。

ここでやつと考えがきまつて、經濟學を勉強しようということになり、東大農学部農業經濟學科に進まれるわけです。それは當時は、理科系から入つて經濟學の勉強ができる唯一の學部が農學部の農業經濟學科であつたということもありますが、もっと重要なこととして、この時代が一九二九年の世界大恐慌に始まる動亂の時

代であり、この恐慌は日本でも深刻な農業恐慌を伴って社会の深部をゆり動かし、そこから一方では一九三一年の滿州侵略から五・一五事件、二・二六事件を経て日中戦争へと日本の急激な反動化が進行しますが、他方では共産党の三二年テーゼや社会運動・労働運動・小作争議の高揚がみられるという激動の時代であって、農業恐慌によって打ちひしがれた農村の悲惨な状態が、井上先生の農業経済学研究の理論的・実践的パッションをかき立てたことによります。先生は御自分のことを「農業恐慌の子」と称して、それを誇りにしておられました。ここにも井上先生の学問の、その出発点からしての実践的性格をよみとることができます。

東大農学部三年間（一九三一―一九三四年）は、もっぱら『資本論』と『剰余価値学説史』の「素読」にすぎたようであり、また一九三二年の滝川事件と、それをきっかけにした大学・学生に対する徹底的思想弾圧に際しては、当時共産青年同盟に関係しておられた先生は、そのために留置所に放り込まれたこともあり、また。ここまでは先生の生涯の前史にあたるところであります。

井上先生は、御自分の人生を、例のたくまざるユーモアをもって「キセル人生」と称しておられました。「キセルには三つの部分があつてね。先の方が金、次の竹、そのあと吸口のところがまた金、金のところは月給のあるとき、竹の部分は月給がないとき、末川先生に人生三分論てのがあるんだけど、僕の人生は稼業を三分して三つの人生を送ったことになるんだな。欲ばつとる。」（経済学会学生会委員会機関誌『きぬがき』第二五号）

一九三四年に大学を卒業して農林省経済更生部産業組合課嘱託を「拜命」してから、一九四九年九月に「行政機関職員定員法」、いわゆるレッド・ページ第一号として農林省を追放されるまでの一五年間が先生の人生の第一期にあたります。この時期のなかでの最初の四年間、つまり二五歳から二九歳までの時期には、一方で農林省

の産業組合課に勤務しながら、他方では小作問題と協同組合論にとり組み、立田信夫のペンネームで『経済評論』誌上に「覆面の論陣」を張って、すぐれた論文をつぎつぎに発表されています。当時の『経済評論』は『プロレタリア科学』の後身で、『唯物論研究』や『歴史科学』と並んで、思想弾圧の下での日本の進歩的科学を発展させようとする数少ない月刊誌の一つでありました。その時の論文をまとめられたのが若冠二八歳の時の処女作『日本産業組合論』（一九三七年刊）であります。

一九三七年の中国への侵略戦争開始の頃から、国内での情勢がだんだん困難になってきて、一九三八年から井上先生は中国の北京で興亜院技師といった仕事をされるようになります。この仕事につかれるには農林省の東畑四郎氏や和田博雄氏の配慮があったようであります。中国での五年間を経て一九四三年には農林省米穀利用研究所技師として日本に帰ってこられますが、戦時中のこの時期が先生のいわば雌伏と蓄積の時代であり、その成果が戦後に一時に花開くこととなります。

敗戦後の数年間は、四〇歳前後で油のり切っていた先生の活躍のもっともめざましい時期であります。一九四五年の春頃からすでに敗戦を予想され、敗戦後の日本民主化の最大の課題が、天皇制の基礎である半封建的寄生地主制の解体にあることを予見されていた先生は、農林省の東畑四郎さんやその他の人達と一緒に合宿されて、敗戦後の農地改革についての論議を行なっています。一九四六年には農林省農政局の経営課長（労働組合の推せんによる）になり、農地改革が進行している農村に新しい経営形態をつくり出すという仕事を担当されるわけがあります。それと同時に、農地改革と食糧問題に関するおびただしい論文を発表されて、激動する現実のなかでみずからの理論を鍛えなおしていかれ、それが『農業問題入門』（一九四八年）と宇佐美誠次郎氏との共著『国家

独占資本主義論』(一九五〇年)に結実するわけであります。だから、敗戦後の四年間も、先生が大学を出られた後の四年間に匹敵するような、いわば昼と夜と人生を倍にして働いた、激動の時代であります。この時期にはまた全農林労働組合の創立に参加して労農同盟の確立に努力され、さらに立教大学講師を兼任されるとともに、民主主義科学者協会の創設への参加や、第一期学術会議会員になられるなど、日本の科学の民主的発展の推進者の役割を果たしておられます。

一九四九年に農林省を追われてからの一〇年間は、キセルでいえば竹の部分、竹というのは筆一本で立っていったんだということと関係があるかもしれませんが、先生は一方では評論活動をやられると同時に、他方では農林省を追放された「七人の侍」と一緒に「日本農業発達史調査会」という城にたてこもって、明治以降の農業発達史の勉強を始めるわけであります。その成果が『日本農業発達史』全十巻、別巻二の編集・執筆という膨大な仕事として残されております。これは日本農学会賞(安藤賞)朝日文化賞の二つの賞を受けておりまして、巻末に付された貴重な資料の復刻と相俟って、内外の日本農業研究者の必読文献になっております。ここでの巻頭論文をまとめたのが『日本資本主義の発展と農業及び農政』(一九五七年)であり、そこでは明治以降の日本農業史と日本資本主義発達史との見事な総合がなされております。この時期にはさらに農業経済学会理事、土地制度史学会理事として学界の発展に大きく貢献されておられます。

日本農業発達史の仕事が終った一九五九年に立命館大学経済学部に招かれてから、亡くなるまでの一五年間が第三の時期であります。そこでは経済学部長、人文科学研究所長、図書館長などの要職を歴任され、立命館の民主的発展に大きな貢献をされますが、同時に生活協同組合理事長、京都平和委員会理事長を勤められ、日本の

平和と独立と民主主義の発展のために尽されます。研究の面では一九六一年から三年間、関西を中心にした農業経済学者と共同で「高度経済成長」下の農村の変貌の理論的・実証的研究をおこなって、「農業基本法」農政を批判されるとともに、京都平和委員会理事長の仕事を通して、「戦争と平和という問題を自分の専門である日本経済分析の基礎の上にとらえ直してみる」必要を感じ、「高度経済成長」の過程をつらぬいている経済軍事化のすじ金を浮きぼりにすることを目指した労作「日本経済の『成長』と軍事化」(一九六八年)を発表されています。以上が井上先生の略歴の紹介を兼ねた学問的業績の大まかな位置づけであります。これではあまり簡単にすぎますので、学問の内容にまで立ちいって、もうすこし詳しくお話し申し上げたいと思います。

二

まず、井上晴丸先生主要著作年表(巻末参照)というのを御覧いただきたいと存じます。これは井上晴丸著作選集全七巻の仕事をもとめられた時に御自分でお作りになったものでありまして、時代の動きのなかで御自分のどの著作を重要なものかと考えていらっしやったかを知る上でも、大変面白い年表であります。

まず最初に、井上先生がみずからのことを「農業恐慌の子」と称し、昭和農業恐慌の研究から出発されたことの意味を考えてみたいと思います。井上先生がいつもいわれていたことは、自分は、日本の農業が半封建的土地所有のもとにおかれているということから出発したのだということです。これは一九三二年五月から翌年八月にかけての『日本資本主義発達史講座』に書かれた人びと、野呂栄太郎さんとか山田盛太郎さんとか平野義太郎さんとかいった、いわゆる「講座派」の人びとの日本資本主義と農業にたいする基本的認識であったわけでありませう。そして、井上先生は講座派系の新鋭の理論家として出発されたわけでありませう。

ところで、一口に講座派と申ししても、いろんなニュアンスの相違があるわけでありまして、そのなかでの井上先生の特徴はどこにあったかと申しますと、この半封建的土地所有のもとにあつて半封建的地代である高率現物の小作料を負担している小作農民は、小生産（スモール・プロダクション）を営んでいるということを確認することにあります。封建社会の農民でさえも封建地代を負担すると同時に自己の小生産をもっているのがありますが、その小生産は封建社会が末期になってまいりますと、だんだん商品経済に巻きこまれてゆく。とくに日本の場合、明治以降工業の部面においては商品経済と資本主義経済が急速に発展しておつて、第一次大戦後には独占資本主義の段階にまで到達しているわけでありまして、そういう状況のなかで小生産が商品経済に巻き込まれていくことは避け難いことでもあります。この点を重視しているのが井上先生の農業理論の特色であります。農業恐慌というのは農産物の価格が暴落する現象でありますから、生糸の価格が暴落し、米の値段が半分位になり、野菜の値段が下落するということが、昭和五年以来起つているわけですが、これは農民の小商品生産ということ抜きにしては考えられない現象であります。こうした農業恐慌によって農民が没落するといった状態から、こんどは逆に半封建的生産関係に対する反対運動である小作争議が激発するというのが、全体としての日本農業の構造であります。

もう一度申しますと、日本農業は半封建的土地所有の下におかれていて、高率現物の小作料は半封建的な地代であるということを確認した上で、しかしそこには小生産というものがあつて、それが商品経済に巻き込まれている。しかもその商品経済は封建社会の末期とか資本主義の初期のものではなくて、独占資本主義の下におけるものである。資本主義の発展からいえば末期の段階の商品生産であるという認識、そこから先生の仕事が始まつて

いるわけでありませう。このことは一九三四年に大学卒業後最初にかかれた論文が「東北凶作は何を語るか」(『智識』創刊号)であったということにもあらわれております。

この時期の井上先生の主著が『日本産業組合論』であることはさきほど申し上げた通りであります。これはマルクス主義の立場から協同組合を解明した最初の労作である。近藤康男さんの『協同組合原論』(一九三四年)の理論をさらに発展させ、とくにその日本的特質を明らかにしたもので、日本の協同組合理論と協同組合運動の発展に大きな影響を与え、現在でも協同組合論を勉強する上での必読文献となっております。しかし、これは単なる協同組合論ではないわけでありませう。つまり、これは、さきほど申し上げました半封建的土地所有の下での小商品生産が独占資本と結びつく接点に産業組合があり、日本農業は半封建的収奪と同時に独占資本による収奪にもさらされていることを明らかにしたものでありませう。これはいわば日本農業論であり、日本独占資本論であつて、『日本産業組合論』を協同組合論という狭いわくのなかだけで考えるのはまちがいであります。このことは、井上先生が同じ時期に「半封建的農業分壊の日本的特質に関する試論」(一九三六年)という論文を『経済評論』に連載して、半封建的日本農業が独占資本主義の下で分壊しつつある状況を描いており、半封建的収奪と独占資本による収奪とを同時に明らかにしなければならないとして、これをみてもわかります。これと一体をなして『日本産業組合論』があつたということを確認しておくことが必要であります。

この時期の労作でもう一つ注目しておくべきことは、井上先生の最初の本格的論文が、「北海道に現われた近世的植民運動の特質」(一九三五年『経済評論』創刊号)であつたことであります。資本主義の発達によつての植民地問題の重要性の指摘と、第二次大戦による植民地喪失の日本資本主義によつての意味を井上先生は一貫して強

調しておられます。

次に戦後に移ります。さきほど申し上げましたように、戦争が終わる年の春から、すでに井上先生は農地改革についての実施プランを考えておられるわけですが、その後一九四六年の「再建日本経済綱領・農業編」、「地主制改革案論攻」、「食糧対策・民主戦線展開の目標」、「協同組合法案の解剖」などと、当時の日本農業が直面していた農地問題、食糧問題、協同組合に関する時事論文を、井上先生は農林省農政局の経営課長の職にありながら書いておられます。これらは井上晴丸著作選集第二巻に収められており、農地改革実施過程における当事者の証言として貴重なものであります。それと同時に先生は激動する現実のなかでみずからの農業理論を鍛え直していかれます。「日本農業資本主義化の問題」（『経済評論』一九四七年）と「農業進化の『二つの道』について——危機論との結合を——」（『社会科学』一九四八年）の二つの論文がこの時期における井上先生の新しい理論的達成を示す代表的論文であります。この二つの論文に書かれている中心点はなにかと申しますと、それはレーニンの農業理論、レーニンの農民分解論と、それを基礎とする農業資本主義化の二つの道の理論とを戦後の日本農業の具体的分析のなかに適用されたところにあると思います。当時は、戦前の講座派の理論がもっていた、構造論として固定された見解になりがちな傾向に対する批判として、発展の見地を入れてこなければならないということが言われていました。発展の見地とはなにかというと、封建的な自然経済が商品経済に転化し、その商品経済が農民層分解によって資本家と労働者に分かれるということ、そして、その場合、農業資本主義化に二つの道があるということであります。こうした発展の見地を導入してこなければ、現実の農業の動きが、とくにその当時進行していた農地改革そのものが理解できないのではないかとということが非常に論ぜられたわけでありす

が、そのなかで井上先生の特徴はどこにあったかと申しますと、この農民層分解と二つの道の理論を、単にレーニンがこういつているから、発展の見地を入れるためにはこの理論を適用しなければならぬ、というようなことではなくて、戦前の日本農業の具体的な発展のなかに、それから戦後進行しつつある農地改革の具体的展開のなかに、日本農業の現段階に適合させたかたちでこの理論をとり入れたところにあったと思います。このことは二つ目の論文が「危機論との結合を」という副題をもっていることにもあらわれています。農業資本主義化の二つの道といっても、それは資本主義の発生期の問題じゃないんであって、いまや国家独占資本主義という資本主義の没落期における農業資本主義化の二つの道なのだということが、だから二つの道の理論を適用する場合には、非常に具体的な問題として、日本の現段階の問題として考えなくちゃいかんということを強調されたわけがあります。その当時、いろんな方が二つの道の理論を展開しておりましたけれども、井上先生の理論がもっとも現実に密着した理論であったと考えることができます。この二つの論文を基礎として、それを非常にわかりやすい形にまとめて発表されたのが『農業問題入門』（一九四八年、農業技術協会刊）ということになります。この本は改訂されて一九五一年に青木文庫から発行され、当時は農業問題がブームであったこともあってベストセラーになります。わたしもちょうど大学生の頃でありましたから、卒業論文に井上先生の『農業問題入門』を使わせていただいたことを覚えております。これは入門という形をとっておりますけれども、戦前の講座派的農業理論をふまえた上で、戦後の農地改革の実践の過程で鍛え上げられた新しい理論的展開を非常にわかりやすい形で述べたものであって、いまでも農業問題を勉強する諸君には是非読んでもらいたい、専門書といってよい書物であります。

「危機論との結合」ということが井上先生の農業理論の大きな特徴であります。この危機というのは資本主義の全般的危機のことです。したがって資本主義の全般的危機の産物である国家独占資本主義の理論と農業理論とを結びつけようとしたところにその大きな特色があります。このことは、経済学会学生委員会とのインタビューで、「……農業も独占資本主義における農業問題でしょ。独占資本主義研究と土地問題研究が結合したもの、これが本来のぼくの分野だよね。」とっておられるところにもあらわれております。ここに井上先生の農業理論の特色があり、また国家独占資本主義論の特色があります。

ところで、国家独占資本主義論に関する資料はすでに戦時中から蓄積されていたわけですが、それが一度に吹き出したように出てきたのが一九四八年以後です。この年、井上先生は『潮流』という雑誌の「日本ファシズムへの抵抗線」という特集に、「戦争経済と基本構造との相克」という論文を書かれますが、それを発端として宇佐美誠次郎氏と共同で書かれた一連の論文をまとめられたのが、一九五〇年の宇佐美氏との共著『国家独占資本主義論』（潮流社刊）であります。この本は、その翌年に改訂されて『危機における日本資本主義の構造』として岩波書店から発行されます。これは日本における国家独占資本主義論の先駆的業績でありまして、日本の国家独占資本主義論はこの本から始ったといっても過言ではありません。これは、戦前における「日本資本主義論争」の正しい成果を継承して、その上に国家独占資本主義という概念を導入することによって、新しい見地から戦後の日本資本主義研究の端緒を開いた画期的労作であります。わたしが初めて井上先生にお目にかかったのは、一九五一年、まだ学生であった頃、京都大学経済学部で先生が「国家独占資本主義論」の講演に来られた時のことあります。講演のあとの座談会で、日本における国家独占資本主義への転化の画期について議論があ

ったことを覚えております。講演では、御自分でもしばしば言われていたような、エノケンに似た庶民的風貌と、思想が声になるところで、言葉を選ぶために、せきとめられてちよつとどもる、その独特の話しぶりが強く印象に残っております。

一九四八年の後半から、中国革命の進展とも関連して、アメリカの対日占領政策は急速に反動化していき、一九四九年九月三〇日、井上先生は「行政機関職員定員法」、いわゆるレッド・ページ第一号として農林省を追放されます。その後一九五〇年から一〇年間は「日本農業発達史調査会」にたてこもって、明治以降の日本農業発達史の研究を開始されます。その最初の論文が、一九五二年の『明治以降における農業技術の発達』（農業技術協会刊）であります。「共同執筆、無署名参加」となっていますが、井上先生のイニシアチブで作られた本だと聞いております。ここでは技術史を中心として明治以降、敗戦までの日本農業史のアウトラインが大筋に聞いてかまれております。さきほどの建林先生のお話にありましたように、まず大まかなデッサンをかいておいて、そのあとを埋めていくという絵画的手法が先生のお仕事の特徴であります。ここでもまず確かなデッサンでアウトラインが握まれて、その後『日本農業発達史』全十二巻の膨大な仕事 completes するわけであります。

この『日本農業発達史』における中心問題の一つは豪農論であります。豪農というのは、明治の初年において日本農業の発展を担った階層であり、一面において貸付地をもち小作料収入に寄生している寄生地主的側面をもつと同時に、他面では数町の自己経営をもって、家族労働とともに年奉公の下男・下女といった労働力を使つたブルジョアの農民であり、「前者の面においてはかれらは封建制の維持を必要とし、後者の面においてはかれらは胎動する資本制的諸関係の展開に対して適応性を持ち、歴史的に形成される条件下において資本制的諸関

係の展開に支持を寄せる。この地主的豪農の二面性はまさしく絶対主義の二面性を一身に体现するものであり、しかるがゆえにかれらを維新改革の支持層としてあらしめた」ものであります。井上先生は、明治初期の農業史研究の過程で、こうした豪農層の存在を独自に発掘されていたわけでありますが、これが、当時経済史のほうで、福島大学の藤田五郎さんや庄司吉之助さんの江戸時代における豪農論や京都大学の堀江英一先生の小営業段階説などとも結びついてきて、その接点のところで書かれたのが、一九五二年の「地租改正と殖産興業」という論文であります。この論文は、個条書のようにして書かれた小さな論文ですけれども、さきのアウトラインを今度は幕末から地租改正を経て明治の寄生地主制の展開につながる大きな見通しのもとで書かれた、非常に新鮮な問題意識に満ち溢れた論文であります。この時期には同様な問題意識でもって、「近代日本農業技術史の断想」、「『多肥農業』と日本資本主義」といった珠玉の短篇ものこされております。

日本の農業史の研究をされていたこの時期に、井上先生は農地改革の評価をめぐる論争にも参加しておられます。日本の農地改革は一九五〇年に一応終了いたしますが、その農地改革がいったい戦前の半封建的寄生地主制を解体したのであるか、あるいはそれは解体されないで、再編成されて残存しているのかという問題が非常に重要な問題として論争されていたわけでありますが、井上先生は『日本資本主義講座』(一九五三年〜五四一年、岩波書店刊)の第五巻と第六巻などに論文を書き、再編地主制説の代表的論客でありました。農地改革後の事態の推移のなかで、農地改革が基本的に農業における半封建的寄生地主制を解体させたことが、だんだん明らかになってきましたが、井上先生は深刻な理論的苦闘の末、従来の再編地主制説から徐々に脱皮していかれます。

一九五五年の土地制度史学会で報告され、山田盛太郎編『変革期における地代範疇』(一九五六年、岩波書店刊)に

収録された、「農地改革と民主主義革命の形態」が、そうした理論的転換と新しい理論の展開を示す重要な論文であります。報告当時、わたしは大学院にはいつて間もない頃でありましたが、初めて参加した土地制度史学会で、井上先生がどういう風に理論を展開されるかと固唾をのんで聴いた、なつかしい記憶のあるものであります。こうした日本農業に関する新しい見地と一〇年間にわたる日本資本主義と農業についての歴史的研究をふまえて発表されたのが、宇佐美誠次郎氏との共同労作「日本資本主義構造論の再検討」(「思想」一九五七年)などの一連の論文であります。この時期にはさらに、現代資本主義の農業問題を世界的見地から考える上で示唆に富む論文「世界的過渡期における農業問題」(「経済評論」一九五七年)などの労作もあります。

この時期には井上先生は歴史研究と現状分析とを同時にやっておられたわけですが、その過程でこんどは理論研究の方に向かわれます。その契機はどこにあったかと申しますと、さきほど申し上げました日本農業史の研究は、生産力の発展を軸とする日本農業発達史でありましたから、それでは、いったい生産力というのは何か、とくに農業の生産力が工業の生産力と違っているところはどこなんだということを理論的に解明することが必要になってきました。そこで、この問題について非常に想をこらして書かれた論文が「農業生産力の特殊性について」(一九五九年)であります。これは『日本農業発達史』の別巻下に載っております。ここでは農業生産力が工業の生産力と違うところはどこにあるかということの問題にされ、農業というのは土地を利用した生産である、そしてその土地、つまり耕地にはよく肥えた土地とやせた土地とがある、つまり耕地には豊饒度の差があるということ、ここに農業生産力の特殊性があるのだということを強調されたわけでありました。そして、ある技術水準に農業技術が平準化された場合に、あれこれの耕地の豊饒度の差別性として、農業的自然条件の相違が克服

されない形で露出するという点に、工業的生産力と比較しての農業生産力における自然の特殊の意味があることを明らかにされたわけでありませう。

こういう生産力論をふまえて、こんどは生産関係の側の問題に移ります。農業には地代というものがある、この地代を明らかにするためには、農業生産力の特殊性をふまえた上で地代論を展開しなければならぬというふうに主張されたわけでありませう。どういふことかと申しますと、マルクスが『資本論』第三巻で、地代論を展開しているところを見ると、「同一面積に同量の資本」が投下されていることが前提されている。このことは、資本に起因する生産条件についての競争が究極まで進行していることをあらわすわけでありませう。市場価値論の段階では資本の条件が違ふという前提の下で理論が展開されているわけでありませうけれども、地代論の論理次元になると資本の条件が一定とされている。その論理的手続きが「同一面積に同量の資本」投下という前提なのだというわけでありませう。その意味では市場価値法則は偏倚されているのではなく、貫徹されているわけでありませう。その基礎の上ではじめて、自然に起因する生産条件の差による超過利潤の存在と、その地代への転化による差額地代の形成が理解できるというわけでありませう。この点に井上先生の地代論の特色があります。これが一九五九年にかかれた「マルクス地代論の理論的基盤」という論文の主題であります。この地代論については非常に関心を寄せておられまして、亡くなった日の大学院のゼミナールでも『剰余価値学説史』の中で地代論をもう一度見直してみようということでありませう。その主題は二つあって、その一つはいま申し上げましたような差額地代論が本当に正しいかどうかを再検討してみようということであり、いま一つはあとでも申し上げますけれども、絶対地代が成立する条件としての農業の立ちおくれの問題を古典に立ち帰って考えてみようということであ

りました。以上が筆一本で立たれた一〇年間の仕事の要約であります。

日本農業発達史の仕事が一段落した一九五九年に井上先生は立命館大学に招かれます。ちょうどこの時期は「高度経済成長」が進行中でありまして、その下で農村が急激に変動している。とくに労働力の流出が地すべりに進行しているという事態のなかで、農村は一体どうなっているのかという実態を明らかにすることが必要になってきます。そこで一九六一年から三年間は関西を中心とした農業経済学者と共同で実態調査班を組織して、「高度経済成長」下の農村の変貌の理論的・実証的研究を行なって、一九六一年に成立した「農業基本法」農政を批判します。その論文が「戦後日本の農業制度の破綻」(「立命館経済学」一九六一年)と「高度成長・開放体制下の農業解体」(「農業経済研究」一九六五年)であります。この二つの論文の主題は、「高度経済成長」の下で農村が解体している、そのなかで農民層の分解が進行しているということを明らかにすることです。その場合に、工業とくらべて農業が全体として地盤沈下しているという問題、つまり農業解体の問題と、そのなかで農民層が上下に分解しているという問題、農民の小生産が商品経済に巻き込まれているかぎり、この農民層分解という事は必ず起るわけでありますが、この二つのことを区別して考えてみてはどうかということがあります。また、開放経済体制の下で、日本の農業生産が、主穀の面からも畜産の面からも全体としてアメリカ余剰農産物依存の構造にすっぽりとはまり込んできており、そこから日本農業が解体していくような深刻な危機があらわれているというふうに考えておられたわけがあります。

いま一つの問題は、一九六五年から六年間、京都平和委員会を理事長としておられた関係から、「戦争と平和」という問題を自分の専門である日本経済分析の基礎の上にとらえ直してみる」という必要を感じておられ、それ

を軍事経済という面でもとらえようとしておられる点であります。「高度経済成長」は平和経済で、重化学工業化が急速に進んでいるという見解があるけれども、そうではないのであって、「高度経済成長」というのは最初から、経済軍事化をその中に仕込んであるのだということを強調されております。そのことを明らかにしたのが「日本経済の『成長』と軍事化」（一九六八年）であります。『日本資本主義講座』では、経済軍事化の問題が重要な論点としてとりあげられていたけれども、その後の「高度経済成長」の過程では、経済軍事化の問題に触れないのが普通のようになっているが、自分は一度も経済軍事化の旗をおろしたことはないといっておられました。この仕事は、一九六六年末に最初の心臓の発作を起された後、一〇か月位して回復された後の仕事であります。

井上先生の最近の問題関心について御紹介申し上げますと、その一つは国際通貨危機の問題であります。一九七一年のニクソンのドルショック以来の国際通貨危機の問題を、これこそまさに資本主義の全般的危機の国際金融面におけるあらわれであるとして重視しておられました。一九七一年の夏、二度目の心臓の発作を起された時も、この問題について立命の研究会で報告されていた最中でありましたし、病床にあってでも新聞やラジオの報道をもとにして、しょっちゅうこの問題を考えておられました。たまにお見舞にいった時などにも、人をつかまえては、とめどもなくこの問題を喋りつづけられました。こちらはまだもうハラハラして、「先生、もういいでしょう。」というとき、「いやまあ、すこしぐらい大丈夫だ。」といいながら、この問題を喋っておられました。そして、こんど帰って経済政策の講義をやるとすれば、自分は国際通貨危機の問題を主題にやってみたいと思うということをおっしゃっておられましたけれども、この問題についての論文を書かれる機会がなくて亡くなられたのは大変残念なことでありました。病床でつくられた俳句、「つゝのる危機 見据えて爽涼の 資本論」（一九七一

年)というのがこの時期の問題関心の所在を示しております。

いま一つの問題関心は、農業と工業との発展の不均等の問題がどうなるのかということであり、**「第二次大戦後の最近の農業機械化のヨーロッパにおける進展というこの表面に眩惑されたりあつかい方で、絶対地位がなくなっている」と主張する議論が、ソ連経済学者のなかにあるようであるが、これにはきわめて重大な誤りともみるべき問題点が含まれている。」**とされながら、それについて根本的に考えてみる必要があるということ、大学院でこの問題を取りあげながら、この夏にも、それについて、論文にはならんけれどもちよつとまとめてみたんだ、というようなことをおっしゃっておられました。先生の最後の論文になりましたが、『科学と思想』という雑誌の創刊号にのった**「社会の生活と自然——自然の再生産と社会の再生産」**(一九七一年)という論文は、現代の公害問題を取りあげて、それは資本の拡大再生産が自然の再生産を破壊し、それと敵対的關係にまでなったものとしてとらえ、自然と社会と人間の意識とを全体としてとらえた、スケールの大きい一種の哲学的世界観を展開し、そこから現代資本主義批判の基礎視角を提供していますが、ここでも**「都市と農村の対立」**の問題が出发点になっております。したがって、この論文は農工間の不均等の発展の問題を取り扱ったものだと、いうこともできますし、さらにいえば、若い頃からの統一的な世界観にたいする欲求が、農業問題を濾過した上で、このような形で実現されたのだといえなくも無いと思うのであります。先生の最後を飾るにふさわしい雄大な論文であります。以上で井上先生の学問的業績の概略をみたことにいたします。

三

最後に井上先生の学問的態度を貫いていたものは何であったかということを通じて私のお話を終りたいと思

ます。その第一は、井上先生が終始一貫、極めて実践的な関心から学問をやっておられるということであり、そもそも最初の学問的出発が、農業恐慌でうちひしがれた農村をどうするかという問題でありましたし、戦後の激動期にもまた、戦後日本民主化の最も重要な課題である農地改革をどうやって徹底的に遂行するかということとでありました。最後の問題関心もまた資本主義のこの危機のなかで、新しい変革の可能性をどこに見出すことができるかということであったと思います。ところでこの実践的課題に理論的に立ち向かっていく場合に次のようなことを言っておられました。「自分は大学の先生になろうとは思っていませんでしたので、あまり『型』の勉強をしていない。しかし、大学で袋竹刀をさげて『型』ばかり練習していても、それだけでは役に立たない。理論は真剣勝負で鍛えることが大切だ。そして、勝負をする時には一歩前に踏み出して戦うことを考えなければならぬ」と。先生はスポーツにはあまり興味を示されませんでしたけれども、ただ相撲だけは例外で、テレビにかじりついて始めから終りまでみておられました。相撲というのは一瞬の立ち会いが大事で、そこで一歩でも前に出た者が勝ちだという相撲の面白い味が先生の主張に合致していたためであらうかと思えます。

第二の特色は芸術家的独創性ということとあります。井上先生は若いころから絵がお好きで、「ぼくはかつて中学生時代に自分の志望を定めるにあたって、脳裡をかすめた程度ではあるが、『画家』をという野望が浮かんだこともある。」とっておられますように、常に矢立を携えて絵筆をもち、墨絵のスケッチから、パステル、水彩、油絵にいたるまでの絵画にたんのうでありました。学生のアンケートなどで、「趣味は」ときかれた時などにも、ためらわずに「絵画、メシよりも好き」と答えられるのが常でした。最近病気になるから、心臓の病よりも「絵画病」の方が重症で、「病こうこうに入った」感があり、絵画にたいしては熱狂的な愛着をもつ

ておられました。だけど、わたしは残念ながら先生の画かれたものをあまりいただいておりません。ただ一つ、今年の春、先生が九州大学に心臓の病気を診てもらいにいかれた時に、そのついでに五高時代の友人と二人で北九州の邪馬台国の跡をみて回ったというのです。そしてはるかに朝鮮半島を望みながら、日本の古代史についての新しい着想を得たというわけです。その話を芦田君と二人で、上七軒のあまり上等でないトンカツ屋で散々かされました。その時に、その岬の牧場で放牧されている牛を写生していたら、その牛が急に産気づいて子牛を生んだという話をされました。わたしは、このメニューをとって、あまり上等じゃないメニューなんです、「この裏に、その牛をちょっと画いてみてくれませんか」といって差し出したわけです。先生は黒と赤のボールペンを器用に使いわけながら、岬の牧場で牛が草を食んでいる状態を描いて、

岬なる 牧場の春に 牛産まる

春浅き 浦里静けく 倭人伝

舟大工 働きいたり 春の浦

壺焼や 岬の春の 奢おごりなる

この奢りなるがいいのであって、奢りかなでは駄目だという講釈をだいぶ聞かされましたけれども、そういう俳句の贅をされました。当日、先生は大変ご機嫌で、とめどもなく喋りつづけられました。わたしは、先生にも店のおかみさんにも内緒で、そのメニューをそつと懐にしのばせておきました。それが、今はもうその筆者を失って、ここにあります。痛惜の極みであります。

このように井上先生は非常に芸術家的資質の豊かな人ですが、それが先生の学問の特色でもあります。

非常に独創的で、切れ味がよく、一步前に出たところから、ものごとの本質を直観的に鋭くつかんでおられます。このことを先生は芭蕉の言葉に託して、「古人のあとを求むることなかれ、古人の求めたところを求めよ」(青木文庫版『農業問題入門』の中扉)といっておられました。

井上先生の絵の方の絶筆は、画家の品角一郎さんと一緒に、美山の奥の山小屋でかかれた「美山の春」であります。随筆の方の絶筆は、細野先生と東大の横山先生と三人で大西良慶師の白寿を祝って、「いづれおとらず信心には縁遠いものたち」が、清水詣うでをした時に、水笛を買ったという話から始まり、はるかに遠く北京の空の鳩笛に思いを馳せ、当時の中国人労働者と日本の老人問題でおわる名随筆「水笛と鳩笛と虫と」であります。

井上先生の癖を一、二紹介しておきます。一つは、この写真(経済学会学生会委員会機関誌『きぬがき』第二五号所収)が、先生の特徴をよくとらえていると思えますが、おそらくこれは建林先生が俳句をお作りになって、井上先生がその俳句をみながら批評をしている情景じゃないかと思うのですが、右手の人指し指と中指を一緒にして小さな輪を描きながら何かしゃべっているでしょう。何か話す時にはこの指が実によく動くので、ときに速く、ときに遅く、くるくると回るとこの指を眺めながら、わたしにはそれが思想の糸をつぎつぎとつむぎ出してくる糸車のように思われるのです。ただ、話をされる時にちょっとどもるのです。思想を言葉にする時に、どういう風に表示しようかと思つて言葉を選ぶために、言葉がスムーズに流れないわけです。それが激しくなるとこうなります。「つまり、つまり、うん、そうだ、わかるだろう。」これではなんにもわかりません。御自分だけをよくわかっているわけでありませう。

井上先生の次のようなエピソードは、立命館ではいまでも多くの人びとに語りつがれております。

一九六〇年の安保闘争の時、井上先生は立命の教授団の代表として上京することになっていました。教授団の白タスキをかけ、演壇がわりのトラックに押し上げられた先生は、例の独特の話しぶりで、「つまり、つまり」を連発しながら「寝ている者は立て！ 立っている者は歩け！ 歩いている者は走れ！」という名文句を発して、広小路キャンパスを埋めた教職員・学生に深い感銘を与えたのでした。

一九六三年の「学費問題」の時には、こんなユーモラスな情景もあらわれました。当時法学部長であった細野先生が、ひとしきり雄弁をふるったあと、隣にいた経済学部長の井上先生に、「君、なにか言えよ」といわれたらしいのであります。とたんに立ち上った先生は、二、三分間あたりをへいげいしていましたが、やおら腰をかがめて隣の細野先生に「俺は何をしゃべったらいんだ」と小さな声できいた、というのであります。

このように、ユーモアをまじえて語りつがれているエピソードは、井上先生の率直で私心のない人柄が多くの人びとを魅了し、すべての人びとの敬愛の的であったことを示しています。学生と接する時でも青年のように学問と人生を論じて飽くことを知りませんでした。

井上先生はその豊かな才能のすべてをつくして日本の平和と民主主義と社会進歩のための理論的・実践的たたかいのために献身されました。先生が日本資本主義分析と農業問題の理論的・実証的研究の上でなされた業績は不滅であります。現在の日本資本主義と農業が解決を求めている課題はあまりにも大きいものがあります。わたくしたち後に残されたものは、井上先生の「求めたるところ」を求めて、この課題の解決にいま直ちに立ち向かうことを誓って、先生が安らかに眠られることを祈りたいと思います。